

大阪商業大学学術情報リポジトリ

各種大型将棋成立の背景に関する考察ーなぜ中将棋や泰将棋が作られたのかー

メタデータ	言語: ja 出版者: 大阪商業大学アミューズメント産業研究所 公開日: 2018-05-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 古作, 登, KOSAKU, Noboru メールアドレス: 所属:
URL	https://ouc.repo.nii.ac.jp/records/570

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



各種大型将棋成立の背景に関する考察

—なぜ中将棋や泰将棋が作られたのか—

古 作 登

1. 130枚制大将棋から中将棋の成立——偶数路盤採用と省略された駒の理由

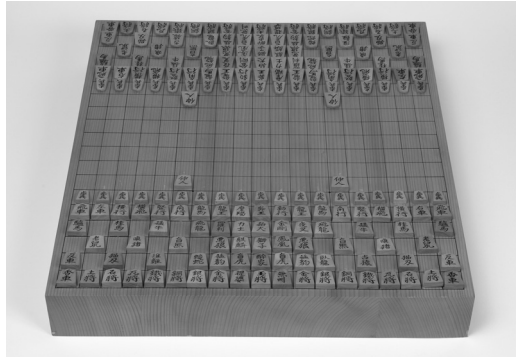
日本の将棋は現在主に遊ばれている 9×9 、40枚前後の将棋（小将棋系）のほかに盤が大きく駒の種類や数もはるかに多い大型将棋（大将棋系）の2つの系統に分かれる。「大将棋」の文字が初めて文献に現れたのは平安末期の有力貴族、藤原頼長（1120～1156年）の日記『台記』である。そこに記された大将棋が「平安大将棋」だったのか、それとも「酔象」駒が取り入れられた 15×15 路、130枚制の「大将棋」だったのかは明らかでないが、日記にある対局日が1142（康治2）年9月12日だったことを考えると、まだ平安時代後期であり「平安大将棋」と考えるのが妥当であろう。すなわち平安時代中後期に原典が編纂された事典『二中歴』に記されている 13×13 路、68枚制の大将棋のことである。この大将棋に「酔象」の駒は採用されていないが、駒自体は11世紀末の時点で作られていたことが奈良市・興福寺の発掘物などで明らかになっている¹⁾ので、この時期は遊戯を面白くするため複数の駒を取り入れたり外したりする試行錯誤が行われていた可能性が高い。これまで研究者の間で鎌倉時代に入って作られたと推定されている130枚制の大将棋は「平安大将棋」に存在した駒が表記や動きが変わっても²⁾ほぼそのまま採用されておりシンプルに駒を増やすことによって遊戯としての面白さを増そうと工夫したと考えられる。

駒を追加するにあたっては、筆者は中国伝来の仏典や神仏習合の影響が大きいと2015年発表の論文³⁾に記したが、平安末期から鎌倉時代初期の貴族の日記の中でも代表的な藤原定家の『明月記』に以下のような将棋に関する記述がある。

建仁元年（1201年）三月

廿二日、天晴、

午終許参上、以前出御、棧敷方、又御釣殿、御暮・御将棋、暫入御、遊女参着、郭曲了



写真ー１ 鎌倉時代の大将棋 15×15マス、29種130枚。「酔象」「獅子」などが追加

退、

又御馬、有雅・親兼・忠信等供奉、召公経卿馬騎御、小時入御了、各退下、
十首歌先日給、来廿八日可進之由有仰、（以下略）

このとき定家は後鳥羽上皇の水無瀬行幸に随行していた。この地は後に水無瀬神宮が建立され、将棋駒作りの名手水無瀬兼成らを輩出した将棋に縁の深い場所である。当時この地は天皇の離宮があり、余暇を過ごすための場所として機能していた。上記の文では離宮で暮、将棋だけでなく遊女などを呼んで歌会を催し、側近らと交え優雅に余暇を過ごしていた娯楽好きの上皇の姿が描かれている。定家の日記にはこの2年前にも以下のような記述がある。

正治元年（1199年）五月

十日、自夜雨降、暁更 甚雨如注、終日不休、河水大溢、
八条坊門川原辺在家、悉流云々、
依番为上格子参上、殿下出御、於御前指将碁 国行被召合、
三盤了、殿下御堂了、退下、（以下略）

大雨で河川が洪水になって家が流される災害が発生したことを定家が殿上に報告に行った際、後鳥羽上皇⁴⁾の御前で将棋を3局指しそれを上皇が観戦していた、という記述である。『明月記』からは平安時代から貴族の中で日常的に遊ばれてきた碁と並んで将棋が親しまれていたことがわかるが、それらは主に現在の将棋に近い「小将棋」であっただろう。『二中歴』の平安大将棋、あるいはその後改良された130枚制の「大将棋」が頻繁に遊ばれた形跡は見ら

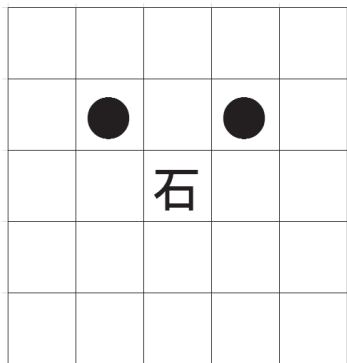
れない。

理由はいくつか考えられるが、まずは駒の種類が現行の将棋（ 9×9 マス、8種40枚）と比べ29種類と多いためルールを覚えるのが困難なこと。次に手数がかかりすぎ、いかに有閑階級の貴族や高僧といえども、1局を限られた時間の内に終えることが難しかったと考えられることである。上記のように将棋、囲碁、和歌などさまざまな遊びをたしなむことが求められた貴族にとって、一つの遊戯だけに時間を費やすわけにはいかず、当然将棋や囲碁のような盤上遊戯も慣例に従うよりなかったことは想像に難くない。

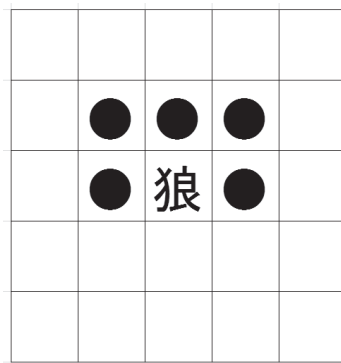
現行将棋（取った駒の再利用あり）における平均手数は110～120手前後、将棋と並んで平安時代に人気のあった盤上遊戯の囲碁は2倍の250手前後である。後述する中将棋（ 12×12 マス、21種92枚）は大将棋よりずっとコンパクトであるが、現存する棋譜の多くは終局まで200手～300手ほどの手数がかかっており囲碁に近い手数である。駒数で約1.5倍の大将棋を詰みに近い局面まで対局したら少なくとも400手程度かかることは間違いなく、真剣に勝負を争った場合1手平均1分の所要時間⁵⁾で計算すると1局を終えるためには約7時間、1手30秒の早指しでも3時間以上かかることは必然であり、公務を済ませた貴族や僧侶が早い時間から対局を開始してもなかなか日没までに終えることができなかったのではないだろうか。

そこで当時の知識階級、おそらくは仏教寺院や宮廷で大将棋を基にコンパクト化しプレイアビリティを高めた「改良大型将棋」すなわち中将棋が作られたと考えられる。まずは手数を短くするために盤を狭くし、駒の種類と数を減らす。 15×15 の大将棋と 9×9 の平安将棋の間をとると 12×12 となる。偶数路盤は日本の大型将棋の中で唯一と変則的ではあるが、ちょうど真ん中に定めたと考えれば納得のいくサイズだ。大将棋にある駒のうち特徴が乏しい（主に動きの面で強力でないか、ある程度強力でも似た動きの大駒が存在）駒「鉄将」「石将」（図1）「猫刃」「悪狼」（図2）「飛龍」「猛牛」「嗔猪」が除かれた。

これら中将棋を考案するにあたって除かれた駒の表記の意味は大将棋の主軸駒ともいえるべき酔象や獅子、鳳凰などと比べ仏典、神道との関係が薄いと考えられる。動きの面で唯一例外ともいえるのは、平安将棋から存在し他の小将棋系、大将棋系のほとんどに存在する重要な駒「桂馬」が排除されたことで、遊戯性の観点から注目に値する。桂馬のように他の駒を飛び越えることができる系統の駒は将棋系ゲームの原点であるチャトランガ（アシュワ）ほかシャトランジ（ファラス）、チェス（ナイト）、象棋（馬）、マックルック（マー）など小路盤（いずれもタテヨコ10路以内）のチェス・将棋系遊戯すべてに存在し、数も象棋に馬と砲の2種がある以外（砲は相手駒を取るとき飛び越えられる）は1種のみと別格の扱いである。このことは



図一 1 石将（図では石と表記）の動き。●の地点 2 箇所のみでゲーム性に大きな影響を与えない



図一 2 悪狼の動き。平安大将棋の鉄将と同じ動きでかなり強力な小駒（大将棋の鉄将は前 3 箇所のみ移動可能で働きが弱められた）。ただし狼は仏教や十二支との関連は薄い

中将棋の創案時に既存の考えにとらわれず、対局して面白い将棋を作るため大胆なルールの再構築が行われたことを示唆するものだろう。桂馬が取り除かれた経緯を示す史料は見つからないが、他の駒を飛び越えることができるという動きの共通性では大将棋から受け継がれた「獅子」（周囲 2 マス先まで移動可能）や「鳳凰」（縦横 1 マス斜め 2 マス前に移動）「麒麟」（斜め 1 マス縦横 2 マス前に移動）の存在が影響した可能性があると思われる。

写真一 2 が代表的な中将棋の盤駒である。大将棋に比べると駒の数、種類がぐっと減ってルールも覚えやすくなりプレイアビリティは格段に向上したと思われる。実際、中将棋（中象碁・中象戯）は15世紀以降の貴族の日記に将棋（小将棋・小象戯）、囲碁同様たびたび登場す



写真一 2 中将棋駒（熊澤良尊氏・蔵）後手側の駒は成った時の性能を示すため後手側の左半分を裏にして並べてある

る代表的な遊戯になり定着した。

中将棋が指されたことが記録されている文献は室町時代の公家の日記に多く、その流れは江戸時代になっても受け継がれた。

『当代記』慶長18年（1613年）3月の条

五日、碁打ちの本因坊、召しに依り印参す。碁の儀色々院宣有り。中にも仙人の打ちし碁の作物、直に院作有て、本因に見せらる。（中略）又月合の比、利玄、招に依り院参す。是へも右の作物同前なり、則ち利玄これを仕る。奇特の由宣下有り。利玄、院、中象碁を遊ばさる。本因、利玄は出家の為に依りて也。何も法花宗⁶⁾也。さて右の兩人も駿府へ下る。院は中象碁天下一と思召す。

上に引用した『当代記』は『信長公記』を基に寛永年間（17世紀前半）に成立したとされる史書。本因坊算砂を招いて後陽成天皇（1571～1617）が仙人による碁の作り物（詰碁）を見せ、算砂のライバルである利玄にも同じように見せた。利玄は後陽成天皇と中将棋を指したが、その実力は利玄のような名手に並ぶほどだったということを記している。算砂は将棋の初代名人大橋宗桂との棋譜が残っているように小将棋（現在の将棋）の名手でもあったが、囲碁のライバル利玄は中将棋を巧みに指すことができたようだ。天皇や公家、僧侶に親しまれることで将棋、中将棋が室町時代から江戸初期にかけ囲碁と並ぶ定番の盤上遊戯としてその地位が確立されたことがわかる記録である。

2．曼殊院史料に見る中将棋——仏教寺院で重要視された中将棋

中世の将棋に関係が深いと思われる史料が存在するという情報を得て、筆者は2015年6月遊戯史研究者らとともに京都市左京区の「曼殊院」を調査のため訪問した。この仏教寺院は平安中期10世紀中ごろから続く天台宗の門跡寺院であり、菅原道真を祭神とする北野神社（現在の北野天満宮）皇室との関係も深い。歴代の曼殊院門主（門跡である住職）は北野神社の別当（責任者）でもあった。天台宗では法華經の經典を重要視しており、これは江戸時代に初めて棋士として俸禄を得た寂光寺の住職・本因坊算砂（囲碁初代名人）や算砂のライバルで囲碁の名手で中将棋の指し手でもあった本能寺の僧・利玄の宗派、法華宗とも浅からぬ関係があると



写真 - 3 曼殊院の一室から見た境内。国宝、重要文化財を多数所有する歴史ある寺院

考えられる。

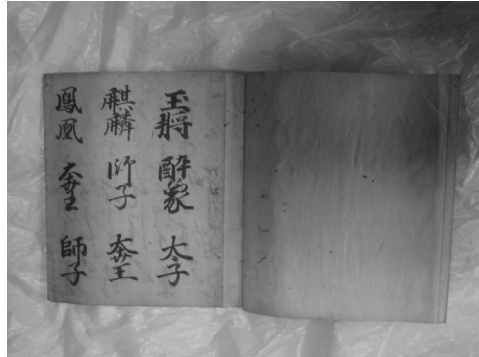
知的階層の集まる宮廷や寺院、神社で貴族や僧侶が対局することはしばしばあったろうし、知的遊戯に関する理解は深かったことが想定できる。こうした知識人たちが盤上遊戯とどのように接していたかを想像することができる史料が以下に示す『将碁馬寫』である。

曼殊院が所蔵する数多くの貴重な史料の中から取り出されたのが『将碁馬寫』と表紙に記されている冊子（写真 - 4）。寺院の管理者の話によると、これまでほとんど表に出ることがなかったため、制作年代ははっきりしないとのことだが保存状態は極めて良い。「将碁」は将棋の意味、馬は駒を意味する。「寫」は写すということで、駒文字の書き方手本と推定できる。このことは、おそらくは室町時代、曼殊院の僧侶にとって駒文字を上手に書くことが大切な役目の一つだったことを示すものであろう。

本文中に解説はなく、ただ将棋駒の文字が達筆で描かれている。駒の種類から推定して中将棋専用の駒文字習書ということは明らかな。中将棋の駒と小将棋の駒はほぼ共通しているが、



写真 - 4 曼殊院所蔵の「将碁馬寫」（将棋駒写） 研究対象として閲覧されたのは今回が初めて



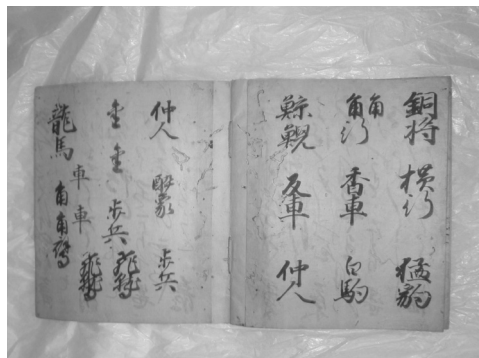
写真－５ 酔象などいくつかの駒文字には複数の書体が存在する

この冊子に桂馬の文字見本がないことが論拠である。現行中将棋の獅子に関しては「師子」と書かれており『仏所行讃』などの仏典にある表記（ケモノ偏をつけない）に一致する。

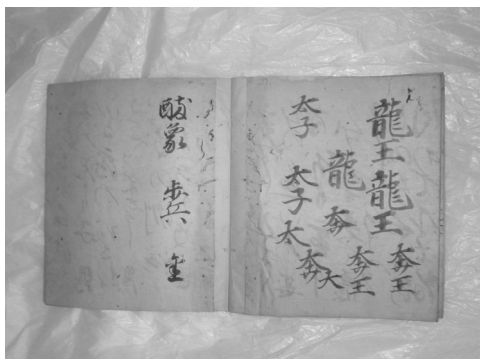
また注目すべきはこの書体手本に紙背文書が存在することだ。今回の調査では当該史料を詳しく分析することができなかったが、もし精査することができれば本資料のおおよその制作年代などを知る手掛かりになるであろう。なお裏移りした文字から推察するに、紙背文書は将棋の駒文字に関連した内容ではないと思われる。中将棋が文献に現れたのは室町時代中期の15世紀以降であるが、紙が貴重だった古い時代の史料である可能性は高いだろう。

史料には銀将や香車、歩兵が成った時の裏の「金」の書き分け方についても示されている箇所（写真－８）がある。同じ字がたびたび提示され書き方のコツを示しているような個所も多く、これらのことから室町時代にこの冊子を手本に、駒作りそのものを曼殊院で行っていた、あるいは駒作りに関する指導を行っていたと考えることができるだろう。

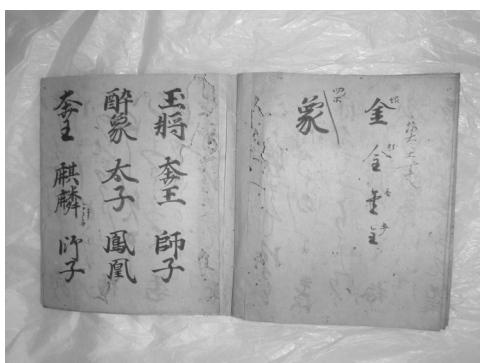
この文書が論文の中で取り上げられるのはおそらく今回が初めてである。巻末には「思●



写真－６ 繰り返し中将棋駒の文字の手本を示している。紙背文書があることにも注目



写真一七 はっきりとはわからないが紙背文書も何らかの習書のように読み取れる



写真一八 右側の頁に駒裏の「金」の書体の書き分け方が示されている



写真一九 巻末には「思●邪」(中の文字●の右にも邪)と書かれているように見受けられる

邪」と書かれていて、●の右に練習したと思える邪の文字が書き足されている。●の文字が「無」だとすれば「思無邪」となり中国の古典『詩経』や『論語』の一節「思い、邪無し」(純粋な心がそのまま表れている)に一致する。

こうした将棋駒に関する古い史料では大阪府島本町水無瀬神宮所蔵の「象戯図」が有名で、小将棋（現在の将棋）から泰将棋まで6種類の将棋の駒の配置、動きとルールが示されており、これはもともと曼殊院にあった文書を写したものとされている。当初仏式で水無瀬宮を建立した公家・水無瀬信成（1197年～1262年）の流れをくむ権中納言・水無瀬兼成（1514年～1602年）は名筆家で駒作りの達人、400年以上経った現代においても駒書体の基礎を築いた人物として知られている。

3．泰将棋の成立——大大将棋、摩訶大大将棋との違い、大型将棋の最終進化形

前項まで大将棋を改良して作られた中将棋が中世の支配層、知識階級の間で頻繁に遊ばれ重要視されてきたことを検証してきた。しかし寺院を中心に行われたであろう大将棋系拡張の試みが止まることはなかった。盤駒の大きさや数で「大将棋」を超える将棋を作ることは、古代から中世にかけ寺の塔が三重から五重、七重⁷⁾になったり、東大寺の大仏のように巨大な仏像が建立されたり、並行して有力な寺社が仏典に登場する如来、菩薩などを数多く作ったことに通ずる。将棋の世界でもただ指すための将棋でなくあたかも将棋盤を仏教の六道（地獄界、餓鬼界、畜生界、修羅界、人間界、天上界）に声聞界、縁覚界、菩薩界、仏界を加えた「十界」、さらに神道の世界観をも反映させようという動きが本格化した。こうした流れは将棋と縁の深かった僧侶や貴族たちの知的探求心から生まれたものであろう。本項では大将棋「大大将棋」「摩訶大大将棋」「泰将棋」について相違点と、制作の背景について考察していく。

盤の大きさの順にまずは「大大将棋」（写真-10）を見ていく。大将棋を17×17マスと一回り大きくしたから「大大」という名がつけられた。駒の種類は大将棋から大幅に増えて64種192枚となった。特徴的なことは他の大型将棋のほとんどに採用されている酔象、仲人、盲虎、桂馬が除かれていること。このことから鎌倉時代の130枚制大将棋から通常に進化したものでないことがわかる。省かれた駒の代わりに加えられた駒の中には中華思想に関連した「東夷、南蛮、西戎、北狄」といった仏教や神道とは直接関係のない命名の駒があり、それらの動きも統一感がなく無理矢理追加した感があり、左右の配置も非対称が多い（ほとんどの将棋は玉を中心として対称的に同系の駒が並ぶ）。これらは中将棋の創造時と同様思い切った工夫であろう。いずれにしても盤の大きさや駒数から時間的に対局して面白いものではなかっただろうし、駒の動かし方を覚えるのも困難な遊戯であったと思われる。

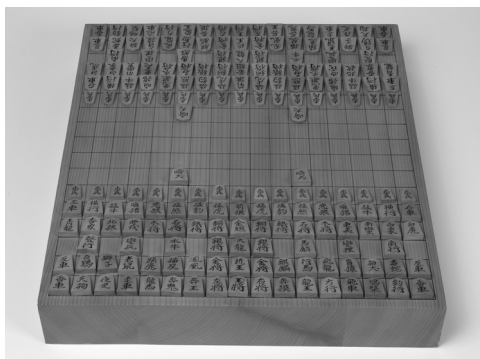


写真-10 大大将棋 17×17マス、64種192枚の駒

さらに一回り大きい19×19マスの盤になったのが摩訶大大将棋（写真 - 11）である。サイズは大きくなっているが駒の数は192枚で大大将棋と同じ、しかも種類が50種と少なく酔象、仲人、盲虎、桂馬などの駒は大大将棋からそのまま受け継がれているため、大大将棋よりこちらが先に作られた可能性が高いと推測できる。プレイアビリティを増すために大大将棋を基にして駒の種類を減らし摩訶大大将棋を作ったと考えるのは難しいからだ。先頭に付けられた「摩訶」の文字は仏典の「摩訶般若波羅蜜多心経」を代表例とするサンスクリット語の「maha」（大きな、優れた）を意味する尊称で、仏教の影響が強く表れている。駒種が少なく覚えやすい（大大将棋と共通のものも多い）ため大大将棋よりプレイアビリティが優れていることは間違いないが、玉が詰むまで指すとしたら少なくとも1日がかかりになることは間違いない。このことも摩訶大大将棋が大大将棋の前に作られたと考える理由の一つでもある。そもそも日常的な対局を前提としない将棋をあえて簡略化（大大将棋を簡略化して作る）する必然性は乏しい。

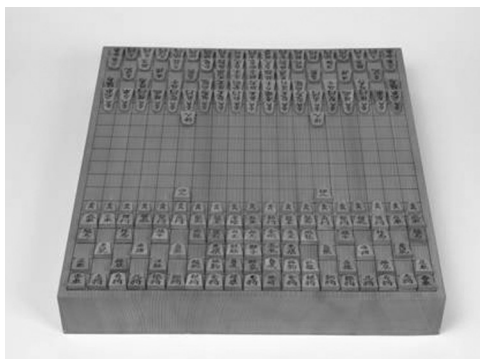


写真-11 摩訶大大将棋 19×19マス、50種192枚。盤は大きいが駒種は大大将棋より少なく覚えやすい

また摩訶大大将棋が対局されたとする当時の文献も見つかっていない。

最後に中世、室町時代までに作られた大型将棋の中で最大の泰将棋（写真・12）について考察する。25×25マスと大幅に盤を拡大したことに加え駒の種類も93種と大大将棋から29も増え、他の大型将棋には存在した自陣内の空間がすべて駒で埋め尽くされている。また玉将が自在天王（文献によっては自在王）に置き換えられているのも特徴。追加された駒の中では「銀兎」と「羊兵」が象徴的だ。これは駒の性能ではなく、この2駒が追加されたことによって泰将棋で十二支の動物がすべてそろったことに大きな意味がある。干支と初期配置駒の関係を順に上げていくと子（鼠）が老鼠、丑（牛）が飛牛と水牛、寅（虎）が猛虎、卯（兎）が銀兎、辰（龍）が龍馬、飛龍、横龍、青龍、大龍、臥龍、巳（蛇）が毒蛇と蟠蛇、午（馬）が馬麟と桂馬、未（羊）が羊兵、申（猿）が古猿と盲猿、酉（鶏）が淮鶏、戌（犬）が狛犬と犄犬、亥（猪）が嗔猪、となる。十二支の動物は仏陀が集めたという言い伝えも存在するし、また仏教の世界観では十二支には子・千手観音菩薩、丑と寅・虚空蔵菩薩、卯・文殊菩薩、辰と巳・普賢菩薩、午・勢至菩薩、未と申・大日如来、酉・不動明王、戌と亥・阿弥陀如来がそれぞれ守護仏として割り当てられており縁が深い。

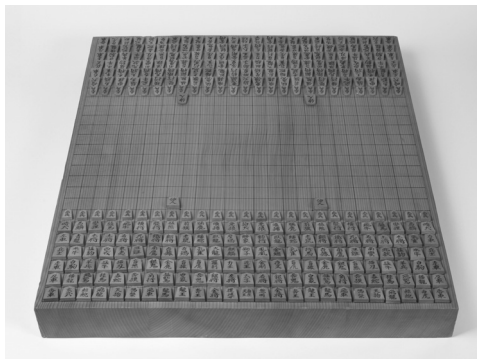
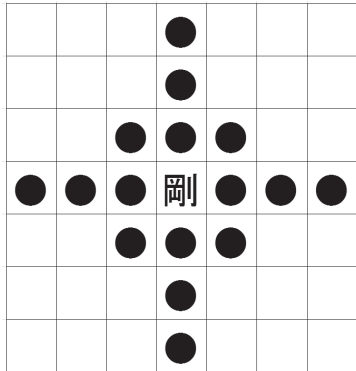
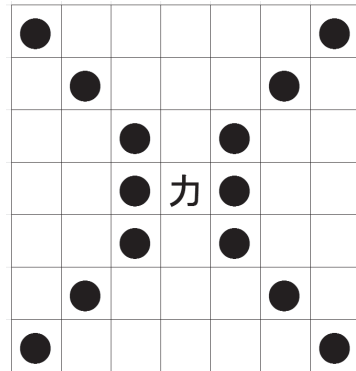


写真-12 泰将棋 25×25マス 354枚の駒 おそらく対局目的では作られていない

自在天王の左に配置された無明は仏教における「十二因縁」の根本となる概念、右に配置された提婆は仏陀に違背し「酔象」（酔った象）をけしかけ害をなそうとした弟子の提婆達多（デーバダッタ）。自在天王のすぐ上にある後継ぎを意味する太子の左右前には仏教の守護神である金剛（図-3）、力士（図-4）の強力な駒がにらみをきかせ、中央列最前部には神社や寺社の入り口にある狛犬が配置されている。東大寺の金剛力士像は有名だし、狛犬はほとんどの神社に存在する。狛犬はまた飛鳥時代に仏教とともに伝わった獅子と対となる守り神としても知られている。



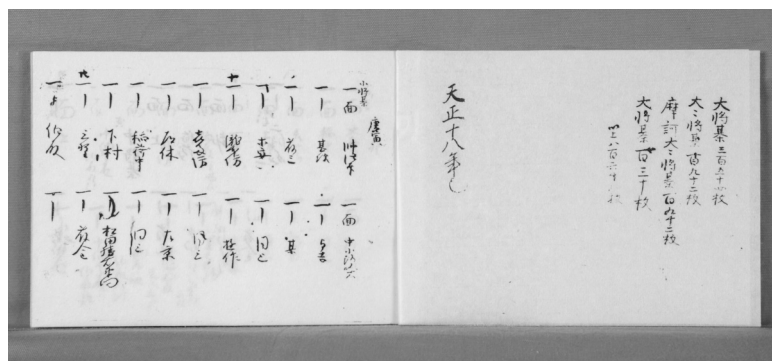
図一 3 金剛の動き。名称にふさわしく、タテヨコにかなり強力な利きを持つ駒として作られた



図一 4 力士の動き。名称から金剛と対になる駒でナナメに特化した性能も対照的

こうしてみると泰将棋は神仏習合の思想を将棋盤上に極限まで反映した「盤上の曼荼羅」といっていいだろう。当然のことながら対局するとしても1日、2日で終局まで進められる遊戯性ではなく、実際の対局記録は伝わっていない。

こうして「宗教的遊具」としての役割が強くなった「大将棋」「大大将棋」、「摩訶大大将棋」、「泰将棋」は安土桃山時代になっても作られていた。将棋駒研究家の熊澤良尊氏によれば、水無瀬兼成が残した1590年から1602年の駒注文記録『将棊馬日記』（写真－13）には737組の駒を作ったことが記され、小将棋618組⁸⁾、中将棋108組と「指すための将棋」は圧倒的に多いが、大将棋～泰将棋も合計11組作られており需要があった⁹⁾ことがわかる。



写真－13 『将棊馬日記』（複製品）水無瀬兼成の駒の注文記録、実物は水無瀬神宮所蔵

4．総論——将棋の改良には複数の意味が存在し、遊戯性のより高いものが生き残った

ここまで鎌倉時代に成立した大将棋を基に小型化した中将棋の誕生、またさらなる拡大を続け泰将棋にまで至った大型将棋改良の2方向性について考察してきた。日記や駒の制作記録などから明らかなように、最も遊ばれていたのは持ち駒再利用ルールの導入によって圧倒的に遊戯性を増した小将棋（将棋）だが、平安時代に初めて作られた大型将棋も歴史に埋没することなく細々とではあるか受け継がれてきた。おそらく大型将棋は仏教や神道の世界観を反映した尊いものという考えが遊戯をたしなむ公家や僧侶、有力武士の間に根付いていたからであろう。それは将棋駒に関する史料が見つかった場所が有力な寺院や神社であり、関係した人物も天皇、公卿、戦国大名・武将であったことから推測できる。江戸時代に入って庶民文化が花開くと、遊戯性の高い9×9マス40枚制の将棋は庶民に広まっていったが、遊戯性を重視して改良されたはずの中将棋は対局時間の長さでルールの複雑さのためほとんど指されなくなっていったのである。

〔注〕

- 1) 2013年10月榎原考古学研究所が旧興福寺境内で1098年のものと推定される「酔象」駒発掘と発表
- 2) 「注入」「猛虎」（平安大将棋）が「仲人」「盲虎」（大将棋）のように同じまたは近い音を持つ文字で表記が変化したことが代表例
- 3) 古作登 最古期の日本の将棋「平安将棋」から「平安大将棋」、「大将棋」への進化に関する考察 大阪商業大学アミューズメント産業研究所紀要2015
- 4) 前年、子の土御門天皇（1196～1231）に天皇の座を譲位しこの当時は院政を布いていた
- 5) 現代のプロ公式戦における秒読みは原則1手1分以内。「1分将棋」と呼ばれプロの棋力をもってしても過酷な条件といわれている
- 6) 法華宗を意味する。利玄は法華宗本能寺の僧
- 7) 七重の塔が作られたことは歴史上、奈良・東大寺、京都・相国寺など文献で明らかになっているが現存はしない
- 8) 徳川家康は50組を超える駒の注文記録が残っており、武将への褒美などに駒を用いたと考えられている
- 9) 大型将棋は関白・豊臣秀次に複数組納められている

〔参考文献〕

- 坂本幸男、岩本裕『法華経』（上・中・下）岩波文庫 1976年
中村元、早島鏡正、紀野一義『浄土三部経』（上・下）岩波文庫 1990年
平川彰『仏陀の生涯——仏所行讃を読む』春秋社 1998年
梅林勲、岡野伸『世界の将棋』将棋天国社 2000年
木村義徳『持ち駒使用の謎 日本将棋の起源』日本将棋連盟 2001年
尾本恵一（編）『日本文化としての将棋』三元社 2002年
原実（訳）『大乘仏典13 ブッダ・チャリタ（仏陀の生涯）』中公文庫 2004年
重松明久『新猿楽記・雲州消息』現代思潮新社 2006年
岡野伸『東洋の将棋』大阪商業大学アミューズメント産業研究所叢書第8巻 2007年

増田忠彦『囲碁語園』（上・下）大阪商業大学アミューズメント産業研究所叢書 2010年
冷泉家時雨亭文庫（編）『翻刻 明月記』（一）朝日新聞社 2012年
清水康二「将棋伝来再考」考古學論攷 檀原考古学研究所紀要第36冊 2013年
冷泉家時雨亭文庫（編）『翻刻 明月記』（二）朝日新聞社 2014年
熊澤良尊、高見友幸、古作登『日本の将棋と文化展』（第13回特別展示）図録 大阪商業大学アミューズメント産業研究所 2014年